

## 滑稽俳句はピン芸人(三)

伊藤浩睦

十七文字で滑稽句を作る場合に、季語の扱いが問題になります。滑稽句ではないふつうの俳句を、吟行で楽チンにする便法として、十二文字を事前に用意しておいて、それに適当に季語を付けるというものがあります。

滑稽俳句で季語はあとから適当にとなると、十二文字で、笑いに至る緊張と緩和を行なわねばならず、そのような都合のいい言葉はそんなには転がっていません。

滑稽俳句の多くは季語を内容に取り込んでいます。上五に季語を置いて、真面目に語り始めて、下五で季語の持つ緊張感を緩和するという場合と、上から中にかけての十二文字で世情を言って、下五の季語で納得させてオチを付けるといった手法の二つが滑稽俳句にはあるように感じます。滑稽俳句では、季語を適当に付けるような字数の浪費は許されず、季語に笑いの重要な部分を担当させることとなります。

今までの滑稽俳句協会の機関誌に載った句を見ても、出来のいい句は季語を巧く使っています。季語はあとから俳句の体裁を整えるために付けただけ、といった作り方は手練れの投稿者の皆さんはまずやっておられません。

季語に笑いの重要な部分を担当させるというやり方は、ピン芸人の一発で笑いが取れる言葉と似ているような気がします。似ているというのはつまり、ピン芸人の一発で笑いが取れる言葉がそのうち飽きられるように、季語の数には限りがありますし、そのなかで滑稽俳句に使い辛い季語もありますから、この手法のみに頼っていたのでは、マンネリになって面白くなるということなのです。

花鳥諷詠であればマンネリになっても、それで構わないかも知れませんが、笑いの句は、前と同じ趣向になるとそれだけで笑いが取れなくなります。滑稽句の型をなぞっても、前に似たようなものを見た記憶が濃厚に残っているから笑えないといった状態になってきます。

今、私の手元にある滑稽俳句協会報は五月号ですがNo.80です、そろそろ十

七文字に過ぎず、季語を入れなければいけないという制約のなかで、笑わせることが出来る句を作るという行為に、マンネリの兆しが見えて来ているような気がします。

もちろん、そうではない、句の展開のさせ方次第で、いくらでも斬新な笑いの世界が構築できるとおっしゃる方もあるかと思いますが、実際に特選や秀逸に入る句は、季語を句の芯に据えながらも、マンネリにならない優れた出来栄ですが、青字の佳句にも入らない黒字の句には、笑えないものが増えて来ているような気がするのです。

十七文字で有季の滑稽俳句でどこまで行けるのか、最近になってそう感じるものが増えて来ています。自身が作っていても行き詰まり感を持っています。

前に七七を置いてそれに付けて貰うとか、二句の掛け合いを認めるとか、三句提出を連句にして物語性のある滑稽を認めるとかいった、句作の手法の拡大のような方向があっても良いのではないかと思います。

(完)